

Title	[浦添関係文献紹介] : 伊波普猷 『古琉球』
Author(s)	高良, 倉吉
Citation	浦添市立図書館紀要 = Bulletin of the Urasoe City Library(1): 74-74
Issue Date	1989-12-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12001/20345">http://hdl.handle.net/20.500.12001/20345</a>
Rights	浦添市立図書館

☆ 伊波普猷著『古琉球』

沖縄研究史に金字塔のごとく聳え立つ著作、伊波普猷著『古琉球』の初版が出版されたのは明治44年(1911)12月のことであった。発行所は那覇の西町で営業していた沖縄公論社、定価は1円50銭であった。再版は大正5年(1916)、東京の糖業研究会出版部から定価1円60銭で、3版も同じく東京の郷土研究社から大正11年(1922)に定価3円で出版されている。

4版は昭和17年(1942)東京の青磁社から2,500部、定価4円80銭で、5版も同社から昭和18年に2,000部、定価同円で、6版も同社から昭和19年に2,000部、定価4円93銭で出ている。4~6版を総称して青磁社版ともいう。戦後、1965年に琉球新報社から復刻版の形で7版、2,000部、定価3ドルで出版されている。そして、8版ともいうべきものが1974年発行の『伊波普猷全集』第1巻に収められた。

このように何回も版を重ね、しかも明治・大正・昭和の全時代にわたってその都度出版された沖縄関係書として『古琉球』は特筆すべき地位を占める。

文字通り「沖縄学の古典」である。

初版の目次を開くと、その中に「浦添考」「琉球文にて記せる最後の金石文」というタイトルの2本の論文が目につく。いうまでもなく、この2本の論文こそ、近代の学問が浦添をテーマに考察を加えた初めての仕事であった。

論文「浦添考」の冒頭で伊波はこう述べている。「沖縄の歴史を調べたことのある人は、浦添(ウラソイ)といふ名称が沖縄の上古史から離す事の出来な

い名称であることに気が付くであらう。むかし舜天や英祖や察度の様な王者を出した浦添は果たして如何なるところであつたらう」。

「浦添は果たして如何なる所であつた」のか、この疑問から伊波は出発した。そしてまず、碑文やオモロに登場する「うらおそい」という言葉に注目し、その語源が「うら(浦)おそふ(襲)といふ言葉の名詞形で、浦々を支配する所といふ意」であるとした。

次に、舜天・英祖・察度などの王統譜を紹介し、「浦添は首里の出来ない以前においては沖縄島の中心であつたらう」、という浦添古都説を提示している。そして、牧港は泊・那覇以前に開けた港であり、その頃の浦添は真和志間切の大半を含む広い土地であつて、「首里ももと浦添から分離したのではなからうか」、という。

この「浦添考」という論文は、伊波が東京帝国大学の学生だった頃、すなわち明治38年に琉球新報に発表したもので、『古琉球』出版の時点で新たに収録された。したがって、浦添古都説は明治38年に新聞紙上で打ち上げられ、明治44年の『古琉球』によって再び世に出て、以降、『古琉球』が版を重ねるごとに普及した学説なのである。

なお、「琉球文にて記せる最後の金石文」は、浦添ようどれの一角に建つ「ようどれの碑文」を学問的に分析した初めての論文であった。

浦添市立図書館には、貴重品扱いで、『古琉球』のすべての版が所蔵されている。

(高良倉吉)